

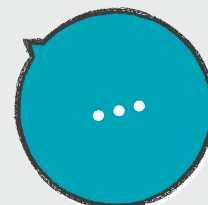
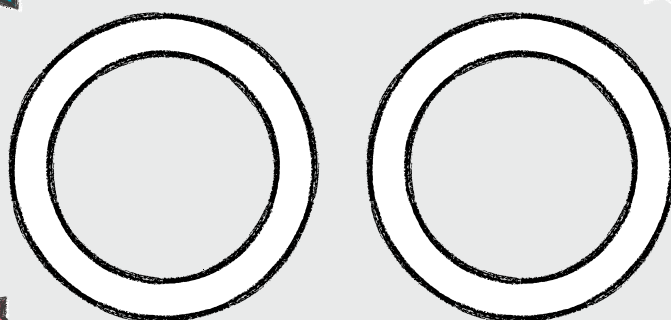
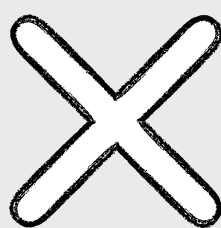
げ い

じ ゅ つ

ぶ ん

か

芸術文化



『やりたい!』がとびだす

ハンドブック

大野城市

はじめに

大野城市は、心豊かな市民生活と活力に満ちた地域社会の実現を図ることを目的とし、「大野城市芸術文化振興プラン」を2019（令和元）年9月に策定しました。「芸術文化 ふれあい 織りなす 大野城」を目指すべき将来像と位置付けたこのプランの中では、基本施策のひとつに「芸術文化に興味を持ち、誰もが体験・鑑賞できる環境づくり」が位置づけられています。市民アンケート調査の結果によると、多くの人が芸術文化の必要性を感じていますが、実践活動をした人は少ないという現状があります。このことから、活動をしたくてもできない原因を把握し、より多くの市民が芸術文化に触れることができる環境づくりを行っていく必要があります。

大野城市と九州大学は2019（令和元）年3月に連携協力に関する協定を結んでおり、2020（令和2）年度から「芸術文化に対するアクセシビリティ*の調査研究」を進めてきました。今回の調査研究では大野城市と九州大学大学院芸術工学研究院院長津研究室が協力し、市民が芸術文化活動にもっと参加しやすくすることや、芸術文化を他の分野の政策に活かすためにどのような環境づくりが必要かを考えてきました。

このハンドブックは、その成果物となり、市民活動団体や行政職員など、芸術文化を活用した企画や事業をはじめたいと思っている人たちをおもな読み手と想定して作成されています。具体的な事例をもとに、芸術文化を用いた地域づくりの手法や活動のヒントを得たり、障がいのある人や高齢者、子どもなどの多様な背景を持つ人たちに対して芸術文化が接しやすくなるような工夫を知ることができます。

このハンドブックを通じて、大野城市において、様々な芸術文化活動が生まれ、より多くの市民が芸術文化に触れることができるようになることを願います。

大野城市
九州大学大学院芸術工学研究院院長津研究室

*アクセシビリティ...

アクセスのしやすさのこと。情報やサービスなどがどれくらい利用しやすいか、とくに障がい者や高齢者などが不自由なく利用可能かどうかの度合いを示すものである。より多くの人が利用できる環境を、「アクセシビリティが高い」などと表現する。

芸術文化×○○

このハンドブックについて

この本は、タイトル「芸術文化×○○」にもあるように、芸術文化と、その他のいろいろな活動を”かけ算”することで、芸術文化に関わる人が増えたり、芸術文化を通じて面白いまちになることを目指して作成されています。

でも、そうはいつでも、芸術文化ってなんだか難しそうで、自分には関係ないんじゃない...？
そう思う人も多いかもしれません。ですが、いま日本全国ではいろいろな形で、芸術文化を市民活動に活かした取組が広がっています。

自分たちが大切にしていることに、芸術文化の考え方を取り入れることで、思わぬ展開が広がるきっかけになるかもしれません。さあ、ページをめくって、大野城のまちでああなたの「やりたい!」を形にするために、第一歩を踏み出しましょう！

この本の使い方



「頑張って活動しているけど、参加者が増えない」「いつも参加するのは同じ人ばかり」...そんな悩みに、芸術文化を取り入れることで、新しい一歩が踏み出せるかもしれません。この本では、「福祉」「教育」「まちづくり」「コミュニティ」などの分野に芸術文化が関わることで、何が生まれるのか紹介しています。パート1～3の中から、興味のあるテーマを選んで読んでみましょう。



「活動を続けていきたいけど、高齢化が進み、継続できるか心配」「自分たちの活動をもっと多くの人に見てほしい」...みなさんが普段取り組んでいる芸術文化活動を、より多くの人に門戸を開くためにはどうしたらいいでしょうか。パート1ではホールや美術館・博物館の取組が、パート3では芸術家自身の声が掲載されています。この本を手がかりに、自分たちの活動を一歩外に広げる手がかりを見つけましょう。



「芸術文化を活用してほしい、と言われても具体的にイメージが湧かない」「芸術文化ってハードルが高そう」...そんな悩みをお持ちかもしれません。この本では、地方自治体に関わるさまざまな政策分野で芸術文化を取り入れた事例を紹介しています。ぜひ事例のひとつひとつから、自分の部署に活かせる視点を探してみましょう。

各パートのポイント紹介

パート1 より多くの人が芸術文化に接するために

障がい者・高齢者福祉とアートをつなげる取組や、ホール・美術館などに接しやすくなる取組を紹介しています。

ポイント

- 芸術文化で何ができる？ → 多様な人がありのまま過ごすことのできるまちづくり。
- 活動を行う時に大切なことは？ → 出会いを新鮮に楽しみ、関わるプロセスを大切に。
- 活動をはじめる第一歩は？ → 一歩外に出て、誰かとつながってみる。

パート2 芸術文化に出会う場をつくるために

学校教育や放課後学習の場、青少年のための居場所などで、芸術との出会いの場をつくる取組を紹介しています。

ポイント

- 芸術文化で何ができる？ → 充実感や自己肯定感など、生きることの楽しみが見つかる。
- 活動を行う時に大切なことは？ → どのようなことが起こっても受け止めることのできる場づくり。
- 活動をはじめる第一歩は？ → まちの中や外にある芸術活動に向けて、アンテナを張る。

パート3 芸術文化をまちに広げるために

公民館などの地域の居場所や、コミュニティづくりの場、イベントなどを通じて芸術との出会いの場をつくる取組を紹介しています。

ポイント

- 芸術文化で何ができる？ → まちに多様な価値観や、新しいコミュニティが生まれる。
- 活動を行う時に大切なことは？ → 参加の敷居を低くして、創造するための「余白」を大切に。
- 活動をはじめる第一歩は？ → いろいろな立場の人と、一緒に企画してみる。

INDEX

- 1 はじめに
- 2 この本の使い方

5 **パート1** より多くの人が芸術文化に接するために

『障がい者福祉×芸術文化』(香川県)

高松市 障がい者アートリンク事業

『高齢者福祉×芸術文化』(愛知県)

長久手市文化の家 福祉事業

『美術館・博物館×市民ボランティア』(千葉県)

佐倉市立美術館 ミテ・ハナソウ・プロジェクト

『公共ホール×鑑賞サポート』(兵庫県)

ピッコロシアター(兵庫県立尼崎青少年創造劇場) 鑑賞サポート事業

13 **パート2** 芸術文化に出会う場をつくるために

『放課後支援×芸術文化』(茨城県)

取手市 芸術家パートナーシップ事業「放課後アートの時間」

『学校教育×芸術文化』(福岡県)

福岡県立ももち文化センター 福岡県内小学校特別支援学級での演劇ワークショップ

『青少年育成×芸術文化』(群馬県)

アーツ前橋 「表現の森」滝沢達史×アリスの広場

19 **パート3** 芸術文化をまちに広げるために

『まち×芸術文化』(福岡県)

大野城市 おしゃべりワークショップ「わたしが知ってる栄町のはなし」

『地域振興×芸術文化』(熊本県)

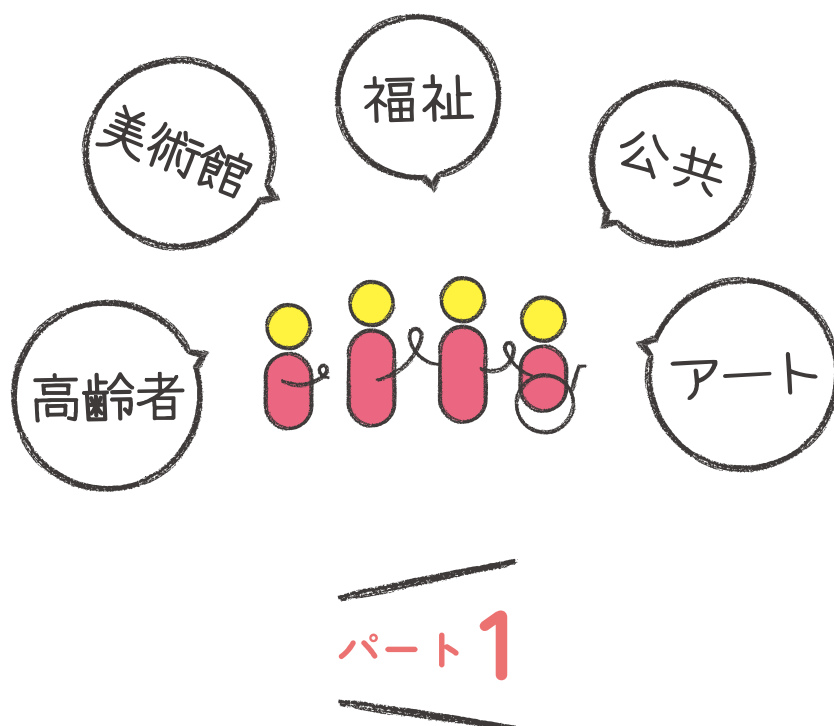
つなぎ美術館 市民参画型アートプロジェクト

『にぎわい×芸術文化』(東京都)

アートアクセスあだち 音まち千住の縁「Memorial Rebirth 千住」

25 解説 芸術文化に「アクセス」するために

28 大野城市での芸術文化の取組



より多くの人 が芸術文化に接するために

障がいのある人や高齢の人たち、
芸術活動に参加することに
ハードルを感じる人たちに対して、
芸術活動を行う時に
何が大切になるでしょうか。



障がいのある人が生み出す世界観を、
いかに寛容に受け止めるか



香川県

高松市 障がい者アートリンク事業

NPO 法人 ハートアートリンク・田野智子さんのお話

「アートリンク」とは、障がいのある人とアーティストがペアになり、関わりながら制作していくプロジェクトです。NPO法人ハートアートリンクは、1999年から岡山県を拠点に活動を始めました。2010年・2013年の瀬戸内国際芸術祭に併せて開催した「高松アートリンクプロジェクト」を発展させ通年で事業を継続することになり、アーティストを障害福祉サービス事業所等に派遣する事業を始めました。高松市のまちづくりの目標の一つ「健やかにいきいきと暮らせるまち」に即した特色ある事業に位置づけられています。派遣アーティストと受け入れ施設のメンバーで行う内容は、絵画・音楽・ダンス・陶芸・テキスタイルとまちまちです。アートリンクに参加しているアーティストと施設のメンバーは、教える・教えられるという関係ではなく、ワークショップ形式のフラットな立場でつながっていきます。それぞれに回数を重ねていくうちに、「自分の内側から出る、なんだかやりたいことを見てくれる人がいる」という安心や信頼、そして表現者としての自信が芽生えています。

多様性という言葉が社会に馴染んできた今だからこそ、障がいのある人が生み出す世界観をいかに型にはめずに、寛容に受け止めることができるかが問われていると感じています。そもそも「障害」は、人と人とのすきまに生じます。障がいがある人とアーティストのコラボレーションは、人と人との関係性、「間（あいだ）」のあり方を常に問い直してきたと言えると思います。

また私たちの活動は、福祉施設の中だけでなく、地域コミュニティの中でも発表の機会を設けています。そのことで、障がいのある人が持つ可能性の発掘や、その人らしく主体的に生きていく場をつくることにもつながっています。様々な人

たちにこの活動に触れていただくことで、芸術文化の持つ価値に気づくきっかけも生まれていると感じます。

「アートリンク」は、障がいの有無を問わず人と人が正面から向き合う機会になり、アートを通じて人と人との関係性を見直すきっかけが生まれ、多様性を受け入れることにつながっていると感じます。



●大野城市職員のコメント

大野城市では、「みんなのチャレンジアート展」という事業を毎年実施していますが、どうしても絵画だけの展覧会になってしまいます。もっといろいろな事業を模索したいと考えているところです。面白い芸術文化行政を考えていくためには、行政職員が実際に足を運び、相手と対話しながら地道に進めていくことが必要ですね。

●社会福祉法人大野城市社会福祉協議会のみなさんのコメント

普段の支援では、障がいのある人と接する時に、ついその人の人間性や特性を傍に置いてしまい、「障がい」だけしか見えなくなってしまうことがあります。本当は一人ひとりと人間同士の付き合いができたらいと思うのですが、なかなか難しさも感じています。今日のお話は、保守的だったのはこちらの側だったなと気付かされ、いかに柔らかに接していくかということを考えさせられました。地域の方との交流があるのも面白いですね。

大野城市での関係部署 ↓ 障がい福祉所管課



高齢者に足を運んでもらえる
きっかけに



愛知県

長久手市文化の家 福祉事業

長久手市文化の家・黒野雅直さんのお話

長久手市文化の家は、愛知県長久手市直営の総合文化施設で1998年に開館し、2018年から福祉事業に力を入れ始めました。

定年退職後の男性を対象としたサックス教室「男のサックスカフェ」は、長久手市文化の家とフランチャイズ・アーティスト（文化の家の創造的な事業に携わる芸術家）の契約をしているのがサックス奏者だということから始まった取組です。

参加者同士の仲が深まり、自主的にスペースを借りて練習をしているという話も聞いており、地域のコミュニティづくりにも貢献しているように感じます。

また、アーティストが高齢者施設などに赴いて演奏会を行う「ふくしであーと」では、コロナ禍以降、福祉施設の中庭で演奏会を開き、入居者に部屋から演奏を聞いてもらう「バルコニーコンサート」を始めました。居室の窓越しに生演奏を聞いたり、演奏を聴くために屋上に上がったりしながら演奏を見下ろす入居者のみなさんからは、生演奏を聞いて涙がこぼれる様子もみられました。

福祉事業を通じてどんどん外に出ていく機会をつくり、自分の地域に文化の家のような場所があるのだということを知ってもらい、足を運んでもらえるきっかけにしたいと考えています。

●大野城市シニアクラブ連合会のみなさんのコメント

大野城市のシニアクラブでは、芸術文化に触れる機会を新しくつくることはできていない現状があります。若い時に芸術に親しんでいた人を除いては、新しいことに挑戦する機会をなかなか作れていません。まずは月に一度の例会で演奏会を開くなど、身近な形で何かできるかもしれないと思いました。



市民ボランティアが美術館を 発信する存在に



美術館・博物館×市民ボランティア

千葉県

佐倉市立美術館 ミテ・ハナソウ・プロジェクト



西川さん



三ツ木さん

佐倉市立美術館学芸員・西川可奈子さん、
NPO 法人芸術資源開発機構(ARDA)・三ツ木紀英さん
のお話

2013年から対話による美術鑑賞プロジェクトとしてNPO法人芸術資源開発機構と協働で「ミテ・ハナソウ」を始めました。2014年からは市民ボランティア「ミテ＊ハナさん」を募集し、美術作品の画像をカードにした「アートカード」を作成し、地元の学校の授業と連携したプログラムや、収蔵している作品を活かして対話型で鑑賞ができる「ミテ・ハナソウ展」も開催しています。現在ミテ＊ハナさんは30名ほどが活動しています。高齢者施設でのワークショップを主導して立ち上げ、自主的な活動を継続しているのが特徴です。
観客としての立場ではなく、美術館をどのようにまちの人に届けるか考え発信する存在になっており、このプロジェクトに関わることが**自分の住んでいるまちを自分ごととして捉えるきっかけ**になっているのかもしれない。

こうした活動は展覧会の付属的な「教育普及」事業として捉えられがちですが、美術館という場所が果たすべき役割や、美術館がなぜこのまちにあるのかという本質に関わる事業でもありますし、市民協働のプロジェクトとしても意味が深いと考えています。

●大野城心のふるさと館職員のコメント

心のふるさと館は主に文化財を扱う博物館で、ボランティア(ふるサポの会)にも運営に関わっていただいております。展示品を解説する時など、歴史的な事実を説明することを重要視しなければなりません。ですが、展示を一緒に考えて楽しむ人としてボランティアに関わってもらふ幅を広げることもできるのではないかと感じました。より自主的にボランティアに関わってもらえるようなプログラムを組み立てることを、検討していきたいです。

佐倉市立美術館

大野城市での関係部署 ↓ 大野城心のふるさと館所管課

公立劇場の仕事は、 劇場に来られない人に思いを馳せること

兵庫県



ピッコロシアター 鑑賞サポート事業

ピッコロシアター広報担当・古川知可子さんのお話

ピッコロシアター（兵庫県立尼崎青少年創造劇場）は1978（昭和53）年に開館しました。全国で唯一、演劇や舞台技術の学校と県立のプロ劇団「ピッコロ劇団」を運営する公立劇場です。近年特に力を入れているのは、障がいのある人でも来場しやすい環境づくりです。

「公立劇場なら、障がいのある人も誰でも行けるべきだよね」という友人の声をきっかけに、障がい者の方の鑑賞環境を整えるため、動き出しました。2015年から、見えない方や見えづらい方には、音声ガイドサービスを提供しています。

「音声ガイド」とは、舞台上の風景や登場人物の動き、表情などをイヤホンを通じて、音声でライブ解説するものです。また、

受付時に、劇団員が舞台セットのようすを模型を使って説明したり、演じる役のキャラクターや衣裳の特徴などを、役者自らが録音したものを開演前に聴いてもらい声を覚えてもらう、などの工夫をしています。

聞こえない方や聞こえづらい方には、ポータブル字幕機（上演中にセリふや音などを手元で文字情報として見られるもの）を用意したり、



舞台両脇のスクリーンに字幕を投影し、セリフや効果音の情報を文字で伝えています。

音声ガイドも字幕も劇団員が制作するので、俳優ならではの個性やこだわりが「演劇の雰囲気にあっている」と好評です。

取組を始めるうえでは、3つのハードルがありました。一つ目は、今すぐ取り組むべき課題か、二つ目は、ニーズはあるか、三つ目は、芸術性は担保できるのか、ということです。

ですが、劇場法も制定され、多様な人が劇場に足を運ぶ環境づくりが求められる今だからこそ、取り組むべき課題だと考えられます。また、障がいのある人にとって劇場は自分たちの楽しめる場所だと思っていないことも多く、ニーズは把握しづら



ポータブル字幕機



舞台両脇に字幕表示



バリアフリー研修

いですが、潜在的なニーズを探っていくことが重要です。芸術性については難しい問題ですが、鑑賞サポートに取り組むことが新たな創造の世界を切り開くことは確かです。実際に、劇団員たちは、見えない人や聞こえない人、**多様な人の存在を想像することで、表現や創造の幅を広げていると感じます**。公立劇場の仕事は、**劇場に来られない人に思いを馳せることだ**と思います。このように環境を整えていると、障がいのある人にどんどん来場していただけるようになり、ついには地元の視覚障がい者協会がピッコロ劇団の後援会に入会するまでになりました。またこのような字幕などの工夫は、障がいのある人だけのためのものでなく、劇場やホールの新たな楽しみ方のツールにもなりつつあります。障がいのある人もない人も、みんなで楽しめる劇場づくりを今後も続けていきたいです。

●公益財団法人大野城まどかぴあの方のコメント

障がいのある人向けに環境を整えていくと、結果的に多様な楽しみ方ができるようになるのが面白いですね。例えば、大文字大鼓さんは盲学校への出張講座なども行っていますし、現状に少し知識や工夫を加えることで、より多くの方が楽しめる環境が作れるのだと、感じることができました。ピッコロ劇団員さんが音声ガイドを実際にやっている映像も拝見しましたが、劇団員さんによる声だからこそ、すごく愛と趣があって、舞台上の世界観と一体感がありましたね。

●大野城市民劇団迷子座の方のコメント

普段は大野城市内で演劇活動をしています。ひとつの公演に対してだいたい3～4ヶ月の間稽古をするのですが、団員はみんな仕事を持っていますし、年齢層も高齢です。今日の音声ガイドのお話などは魅力的ですが難しい印象もあります。ですが、その時にキャスティングされていない役者さんが通し稽古を見てから3週間でガイドを作られているという話を聞き、興味深く、今後取り入れられないか考えてみたいと思います。

インタビュー協力：大野城市民劇団迷子座、大野城市民吹奏楽団、おおの大文字大鼓

大野城市での関係部署 ↓ 大野城まどかぴあ所管課

ポイント

パート1では、より多くの人が芸術に接するための取組に触れてきました。障がいのある人や高齢の人たち、芸術活動に参加することにハードルを感じる人たちに対して、芸術活動に取り組むうえで、どのようなことが大切になるでしょうか。インタビューの内容からまとめると、次のようなことが言えるでしょう。

●芸術文化で何ができる？ → **障がいのある人や高齢の人など、多様な人があるまま過ごすことのできるまちづくり。**

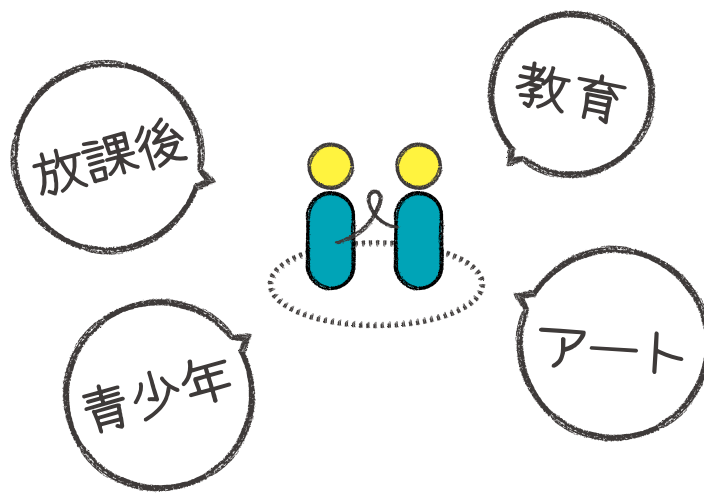
芸術文化へ接しやすくする活動を通じて、劇場・ホール・美術館・博物館などの芸術活動の場が、より多くの人たちにとって身近なものになるでしょう。またそのことで、芸術活動の場のことを「自分ごと」として考える地域の人たちが増えていくことが期待できます。

●活動を行う時に大切なことは？ → **出会いを新鮮に楽しみ、関わるプロセスを大切に。**

多様な人たちに対して、自分たちの常識を当てはめるのではなく、出会いを新鮮に楽しむような視点が求められます。そのためには、芸術文化活動に参加することにハードルを感じる人たちの姿を具体的に思い描くことが大切です。また、作品が完成することも重要ですが、芸術文化活動によって築かれる人と人との関係性自体にも価値があることを意識する必要があります。

●活動をはじめる第一歩は？ → **一歩外に出て、誰かとつながってみる。**

多様な人たちが何を求め、どのような場が安全だと感じるかを知り、理解を深めることが重要です。そのためには、多様な人たちが活動している場所に足を運んでみたり、実際に芸術文化活動を始めようとする時には運営に様々な立場の人たちを巻き込むことも効果的でしょう。



パート 2

芸術文化に 出会う場をつくるために

学校教育や放課後学習の場、
青少年のための居場所などで、
芸術活動を行う時に
何が大切になるでしょうか。

放課後支援 × 芸術文化

取手市

子どもたちが、
異なる感覚を持つ大人と触れ合う



茨城県

取手市 芸術家パートナーシップ事業

放課後アートの時間

NPO法人取手アートプロジェクトオフィス・倉持美冴さん
あーと屋図工室・浅野純人さんのお話



倉持さん



浅野さん

芸術家パートナーシップ事業「放課後アートの時間」は、放課後における子どもたちの活動と取手市を中心に活動するアーティストの接点を生み出し、さまざまな活動を経験してもらうことで、子どもたち、アーティスト双方に新たな経験の場を継続的に生み出していく事業として、2020年から開始されました。この取組は取手市の事業で、NPO法人取手アートプロジェクトオフィスが事業を受託しています。コロナ禍において、学校が休校になり、子どもたちの活動の場に制限が生まれ大きな影響が及ぼされていることが背景にありました。また、制作・発表の機会が失われ経済的な影響を受けているアーティストの支援という目的もありました。そのため、取手市内で活動していたり、取手市に活動拠点があるアーティストを公募したところ、2020年度は16組、2021年度は23組のアーティストが集まりました。芸術のジャンルは美術、音楽、パフォーマンスなど幅広く、多彩なプログラムを展開しています。いろいろな種類の画材を使って即興的に絵を描く活動や、段ボールを使った工作の活動、コミュニケーションをとりながら体を動かしダンスをする活動、楽器作りや指揮体験のプログラムなど、活動の形はアーティストによってさまざまです。現在はInstagramを通じて活動の様子を発信しています。放課後子どもクラブの子どもたちは運営上、学年によってクラブに来る時間や帰る時間がまちまちなので、その状況に応じながら、**成果物だけを求める活動としてではなく子どもたちの自主性を尊重できるプログラムづくり**を意識しています。また、その場にいる全員が必ずしも活動に参加しなくても過ごしていただけるような工夫や声かけなども重要だと思っています。**放課後子どもクラブの支援員**

さんとは違う立場の大人がその場にいることで、子どもたちとアーティストがコミュニケーションをとり関係性を構築し、新たな発見や気づきの場になっていくことが、このようなプロジェクトをやっていく意味だと思っています。

また、習いごとであれば、発表会や展覧会に向けて準備をするわけですが、この事業では成果や結果を求めているわけではありません。また、何か具体的なものを作ってもらふことなど**作品作りやゴール自体を目的にすることはありません**。アーティストという、普段子どもたちが接することのないような、ちょっと変わった感覚を持つ大人と触れ合うことによって、こういう生き方もあるのだな、と感じてくれることを願っています。



●大野城市職員のコメント

本市では、週に3日、放課後の小学校において放課後総合学習「ランドセルクラブ」を運営しています。学童保育の児童も参加可能です。そこで、さまざまな体験活動を行っていますが、毎回1~2回程度で終わるようなプログラムを基本としています。今回のお話から、長期的な取組をやっていくことでの成果について勉強になりました。

●「ランドセルクラブ」コーディネーターのコメント

本市のコーディネーターは、PTA役員を経験した人などが多いことから、顔が広く、多くの方とのつながりを持っています。ですが、芸術文化の活動をするためのノウハウは十分には持ち合わせていません。芸術家とつながろうと思ってもつながる機会が少ない現状があります。子どもたちに対して活動を実施する上では、まず自ら体験していくことと、地域の中にいる芸術活動をしている人に積極的に声をかけていくことから始めたいと思います。

大野城市での関係部署 ↓ 共育推進所管課

学校教育 × 芸術文化

福岡県立ももち文化センター

大野城市での関係部署 ↓ 教育指導所管課



子どもたちが自分の人生を、
自分なりの充実感で生きていけるように

福岡県



福岡県内小学校特別支援学級での
演劇ワークショップ

撮影：野村佐紀子

福岡県立ももち文化センター館長・糸山裕子さんの話

福岡県立ももち文化センターでは、特別支援学級の小学生の子どもを対象とした演劇手法のワークショップを行っています。この活動は、ホームレスの方々と演劇ワークショップを実施した経験から生まれました。若いうちから人間関係を構築する場があることで、その後の人生の生きづらさがゆるめられることを目指しています。

「演劇」と言っても、いきなりセリフを読むわけではありません。最初はとにかく体を動かして、ほぐすことから始めます。演劇ワークショップの特徴は、筋書きはありつつも「どう転んでもいい」という前提があること。これが子どもたちに伝わると、子どもたちは自由な発想を繰り広げてくれます。心の中を動かすという点で、「教える」という教育とは違う何かが存在するのではないのでしょうか。

また、「ファシリテーター」と呼ばれる進行役は、子どもたちのありのままの姿を褒めます。それが自己肯定感の向上につながるのではないかと考えています。このワークショップをきっかけに、子どもたちが自分の人生を、自分なりの充実感で生きていけるようになればいいな、と心から思っています。

●大野城市立平野中学校特別支援学級の先生、大野城市職員のコメント

学校の教員にできることは限られているので、こういう取組があったらいいですね。一方、毎年人事異動もあり、もし実施できても、継続する仕組みづくりが難しいという現実もあります。教育現場が期待しているのは、ただ楽しい場がつくられることではなく、子どもの変化そのものです。ワークショップで子どもたちが楽しく取り組む姿を、先生たちが実際に見ることで、意味を実感してもらうことが、実施・継続への第一歩だと思います。



過去の経験を「生きていてよかった」と
思い返せる経験に

群馬県



アーツ前橋

「表現の森」滝沢達史×アリスの広場

アーツ前橋学芸員・今井朋さんのお話

アーツ前橋は2013年に開館した群馬県前橋市立の美術館です。「表現の森」は、アーティストと前橋市内の施設・団体が協働するプロジェクトで、2016年と2019年には協働のプロセスを紹介する場として展覧会を開催しました。滝沢達史（アーティスト）×アリスの広場（不登校・ひきこもりの若者を支援するフリースペース）では、月に1～2回程度アリスの広場に滝沢さんが訪れ、若者たちと交流をするところから始めました。展覧会では、若者の一人が以前ひきこもっていた部屋や、自殺を考えていた場所の風景を再現したものがありました。トラウマだった過去の経験をアーティストと共に作品にすることで、「生きていてよかった」と思い返せるようなポジティブな経験に変化したようです。若者たちにプロジェクトを通じて感じたことを活動日記として執筆してもらい、ウェブサイト公開する取組も始めました。普段は即興的な言葉が出てきづらく、もの静かな若者たちが、文章になると饒舌になる様子は興味深いです。はじめは参加者として関わっていた人たちが、新たな若者との橋渡しをしていく存在になりつつあります。

●「それいけ☆青年組」のスタッフのコメント

高校生以上29歳以下の青年たちがボランティア活動をしている「それいけ☆青年組」では、普段は小中学生を対象としたクリスマス会を企画したり、宿泊学習の指導員をしたりしています。今回お話を伺った中では、若者たちが自分の考えていることを言葉にして文章化していく取組が興味深かったです。自分の普段は見せない一面を表現するという意味で、とても大切に、自分たちの活動にも取り入れられるポイントだと感じました。

青少年育成×芸術文化

アーツ前橋

大野城市での関係部署↓こども育成事業所管課

ポイント

パート2では、おもに子どもたちを対象とした、芸術文化に出会う場をつくるための取組に触れてきました。子どもたちのみならず、様々な人たちに芸術との出会いの場をつくっていく時に、どのようなことが大切になるでしょうか。インタビューの内容からまとめると、次のようなことが言えるでしょう。

●芸術文化で何ができる？ → **充実感や自己肯定感など、生きることの楽しみが見つかる。**

芸術活動との出会いは、参加する人たちにとって充実感や自己肯定感を持つことができることにつながる可能性があり、自分が生きていてよかったと思える体験につながる可能性があります。そして、参加者自身が、活動に参加していない人や、次の世代の人たちなどに、その手応えを伝えていく存在になっていくことも期待できます。

●活動を行う時に大切なことは？ → **どのようなことが起こっても受け止めることのできる場づくり。**

重要なのは、参加者が自主的に活動できること。場を準備する側は、筋書きを考えたとしても、その場でどのようなことが起こっても受け止めることが大切です。子どもたちにとって芸術文化の体験は、普段から接している先生や支援員の人たちとは違う立場の、芸術家という異なる感覚の大人との出会いのチャンス。参加者に驚きや喜びを感じてもらったり、生き方の選択肢に気づくきっかけになるために、自主的で創造的な芽を大切にする場づくりが求められます。

●活動をはじめる第一歩は？ → **まちの中や外にある芸術活動に向けて、アンテナを張る。**

地域の中にもすでに芸術活動をしている人は多くいらっしゃいます。積極的に声をかけていたり、大野城まどかぴあや心のふるさと館で開かれている催しに足を運ぶなどして、どんな芸術活動を子どもたちに紹介したら面白いか考えてみましょう。行政や芸術文化に関する知識を持つ人に相談するのも一案ですね。



パート 3

芸術文化を まちに広げるために

公民館などの地域の居場所や、
コミュニティづくりの場、イベントなどを通じて
芸術文化を活用したまちづくりを行っていく時に
何が大切になるでしょうか。



お互いの人生を想像し、
味わい合ったその日の体験

福岡県 大野城市



おしゃべりワークショップ 「わたしが知ってる栄町のはなし」

俳優・古賀今日子さんの話

2020年の秋に、大野城市栄町公民館で演劇ワークショップを開催しました。実施にあたって関係者と話し合いを重ね、このまちに暮らす人による、このまちで生まれた物語のラジオドラマを作ろう!と決まりました。

下は10歳から上は100歳まで、幅広い方たちから申し込みがあったことに驚きました。この幅の広さこそが、まちに根差した公民館という場所でワークショップを行う醍醐味だなと感じました。最初は恥ずかしそうな様子を見せていた方も、少しずつリラックスして語り合える「仕掛け」を積み重ねるうちに、自然にマイクの前でご自分の物語を語ってくださいました。これは、**誰もが等しく表現できる場を作っていくワークショップ(体験型講座)の良さ**だと思います。

「まちの歴史を聞く会」のような場だと、誰がいつ、どこで、といった歴史的な整合性が大切になってくるとは思いますが、私がこの場で共有したかったのは、その方の大切な「記憶の手触り」の方でした。なので、みなさんが語ることに對して、それは**正しい事実か?という判断をしない**ことにしました。そのことで、語る人のプレッシャーを軽くし、ゆるやかな対話の場が作られていたように思います。そこで生きた人の、息づかいや、眼差し、喜び、驚きに、落ち着いて目を向けることができたことで、より心に残るラジオドラマになったように思いますし、参加したみなさんは自分の暮らすまちに、より愛着を持たれたかなと思います。お互いに当たり前知っていると思っていた自分のまちに、新たな視点を作ることができたんですね。

自分のことを語り、受け取ってもらえる場があるというのは、生きていく上でとてもハッピーなことです。お互いの人生を想像し、味わい合ったその日の体験は、その後の暮らしにも良い影響を与えるのではないかと思います。私は普段、福岡

を拠点に俳優として活動しています。俳優として舞台作品をつくり発表するだけでは、だんだんと当たり前になってしまう「伝え合う喜び」が、誰にとっても、生きるために必要な、とても尊いものなのだと感じられる。このような企画に関われることは、自分の活動に勇気をもらえる大切な機会となっています。



ラジオドラマ作成風景



●大野城市文化連盟のみなさんのコメント

私も普段から高齢の方や子どもたちを対象として芸術活動を教えることに取り組んでいます。特に高齢の方たちからは、普段は一日中一步も外に出ない人もいたので、続けてください、とよく言われます。今回の事例は、ちょっとでも外に出てみようかなという気持ちになる、とても良い取組だなと思いました。ちょっとしたきっかけで出会いが生まれますし、こちら側もまた得られるものがすごくあると思うんですね。

●大野城市職員のコメント

ワークショップに実際に参加してみて、もっともっと話したい、という気持ちになりました。これをきっかけに、地域内のコミュニケーションがさらに活性化されるといいなと思いました。アーティストのみなさんにとっても、普段取り組んでいる自分の芸術活動を、もっとたくさんの人に知って、触れてもらうきっかけになりますね。自分たちが日頃やっていることがまちの人の生きがいにつながるの嬉しいことだと思います。

大野城市での関係部署 ↓ 文化政策所管課

地域振興 × 芸術文化

つなぎ美術館

大野城市での関係部署 ↓ 地域共働所管課

偶然起こることが積み重なり、
多様な価値が生まれるまち



熊本県

つなぎ美術館 市民参画型アートプロジェクト

つなぎ美術館学芸員・楠本智郎さんの話

つなぎ美術館は2001年に開設した、熊本県南部にある人口4,500人ほどの小さなまち、津奈木町直営の美術館です。アーティストが住民と一緒に、企画段階から膝を突き合わせて表現活動を作り上げる社会教育事業として、2008年に「住民参画型アートプロジェクト」を始めました。始める時には、林業、漁業、地域おこし、農業など職業は様々ですが、**芸術文化に縁がない人に、それぞれ粘り強く説得しながらメンバーになってもらいました。**今ではプロジェクトに主体的に関わる住民が増えました。

芸術家が持っている自分とは違う体験や価値観に関心を示す住民は少なくありません。そこに、さらに**作品を見るだけでなく一緒に身体を動かすようなワークショップが加わると関心が深まるようです。**これからも、芸術が好きな人を増やすだけでなく、予想外なことや偶然起こることが積み重なることで多様な価値が生まれるまちをつくっていきたいです。

●NPO 法人共働のまち大野城のみなさんのコメント

大野城市では、コミュニティによるまちづくりを重点的に取り組んでおり、市全体を4つの地区に分けて、地区に合わせた地域政策を行っています。私が関わっている地域では、高齢の方と若い人たちとの世代間交流が課題となっています。今回のお話を聞いて、芸術というと作品やモノを想像しがちですが、アーティストを呼んで、地域の人たちとアートをきっかけに交流できるのはすごく良いなと思いました。

既存コミュニティの活性化だけでなく、 新しいコミュニティの誕生の場に



熊倉先生



韓さん

(東京都)

Memorial Rebirth 千住

東京藝術大学・熊倉純子先生、韓河羅さんのお話

「Memorial Rebirth 千住(通称メモリバ)」は、東京・足立区で行われるアートプロジェクトです。足立区のイメージを向上させ地域の中の人々の縁をつくることを目指す、区やアーツカウンシル東京、東京藝術大学、地元のNPO等との協働による「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」の一環として始まりました。メモリバは、無数のシャボン玉を一度に発生させる機械を用いて見慣れた景色を変貌させる事業で、現代美術家・大巻伸嗣さんの作品です。

メモリバは 2011年に商店街の一角からスタートし、開催場所を小学校や市場などに移しながら、「シャボンおどり」という盆踊りや「ティーンズ楽団」、企画準備に主体的に関わる市民チーム「大巻電機 K.K.」の発足など、たくさんの人々が関わるプロジェクトとして変化していきました。徐々に「自分たちのメモリバ」という意識が人々に芽生え、既存コミュニティの活性化だけでなく、新しいコミュニティの誕生の場にもなっています。**アーティストが作品ではなく「枠組み」だけを用意し、市民ひとりひとりがその中で創造的な力を発揮してもらうことが、プロジェクトが持続し今後も人の縁をつくるきっかけとなっています。**

●大野城市にぎわいづくり協議会のみなさん、大野城市職員のコメント

「これがアートかどうか」をあえて説明せず、やっていることそのものに住民をただ巻き込んでいく、という手法が参考になりました。行政では担当の職員が変わる中、どう持続させていくか、いかにいろんな主体を巻き込んでいくかを考えなければならないと感じました。仲間集めもそうですし、資金集めも必ずといっていいほどぶつかる壁です。「メモリバ」も10年くらい続けてやっとたくさんの方を巻き込むようになっていて、長年続ける苦労が伺えます。私たちも行政と団体がつながり協力し合い、いかに継続していくかを考えていきたいです。

にぎわい×芸術文化

アートアクセスあだち 音まち千住の縁

大野城市での関係部署 ↓ にぎわいづくり所管課

ポイント

パート3では、芸術文化をまちづくりに活かす取組に触れてきました。公民館などの地域の居場所や、コミュニティづくりの場、イベントなどを通じて芸術との出会いの場をつくっていく時に、どのようなことが大切になるでしょうか。インタビューの内容からまとめると、次のようなことが言えるでしょう。

- 芸術文化で何ができる？ → まちに多様な価値観や、新しいコミュニティが生まれる。

芸術活動がまちを舞台に実施されることで、これまでまちの中で出会ってこなかった人たちが知り合うきっかけが生まれ、そのことを通じて地域に新しいコミュニティが誕生することに結びつくでしょう。今まで出会ってこなかった人たちとの出会う経験が、多様な考え方を受け入れるまちづくりにつながっていくことも期待できます。

- 活動を行う時に大切なことは？ → 参加の敷居を低くして、創造するための「余白」を大切に。

プログラムで重要なのは、参加するためのハードルをできるだけ低くすることです。ワークショップの良さは、いつの間にか自分も表現者になっているという体験が生まれるなど、誰もが等しく表現できる場が生まれることです。また、プログラムをあまり作り込みすぎず、参加者が創造的になれるように、即興で突然何かが起こった時にも柔軟に対応できるような工夫をしておくことも大切です。

- 活動をはじめる第一歩は？ → いろいろな立場の人と、一緒に企画してみる。

まちの中で実際に芸術文化の活動を企画していく時には、芸術文化の専門家だけでなく、普段自分たちが一緒に活動をしていない人たちなど、いろいろな立場の人たちを運営メンバーに入れることがポイントです。そのことで、芸術活動がよりさまざまな領域に広がっていく可能性がひらかれます。

解説

芸術文化に「アクセス」するために

九州大学大学院芸術工学研究院 長津 結一郎

このハンドブックは、大野城市が芸術文化にたくさんの人が「アクセス」できるまちになるために、どんなことを考えていくと良いかをまとめています。市民のみなさんや行政職員が、芸術文化を活用した取組を行ううえでのヒントとなることを願って作成されています（「アクセス」というのは英語で、利用する、近づくという意味があります）。

日本全体でも、芸術文化を活用した取組はたくさん行われています。2017年に「文化芸術基本法」が改正になり、芸術文化以外の政策の分野に芸術文化を活かしていくことの重要性が語られるようになりました。他にも、劇場・コンサートホールがみんなの「広場」になることを目指すような法律（劇場、音楽堂等の活性化に関する法律）や、障がいのある人が芸術活動に接しやすくするための法律（障害者による文化芸術活動の推進に関する法律）など、いま芸術文化を社会的に活用していくことに、全国的な注目が集まっています。

ただ、芸術文化に誰もが「アクセス」するためには、まだまだハードルがあるようです。多くの人々は、芸術文化を自分とは関係のない縁遠いもので、生活とは関係のない娯楽であり、「不要不急」のものだと思っている人も多いことでしょう。芸術文化を鑑賞することや、芸術文化活動に参加することは、普段とは違う非日常的な体験をもたらし、人々の日常を豊かにすることは言うまでもありません。また、社会が抱えている課題に芸術文化が関わることで、これまで課題とされていたことをポジティブに捉え直すためのきっかけになったりもします。芸術文化は、さまざまな価値観を持つ人たちが一緒にこの社会で生きていくために必要不可欠なものです。

実際に、芸術文化を教育や福祉、まちづくりなどに活用することや、芸術文化にすべての人が接することができる環境をつくる取組は、全国的に始まっています。私たちは2年間の研究から、こうした芸術活動への「アクセス」を高める取組の担い手となる、市民活動団体のみなさんや行政職員に伝えたい「心得」を4つにまとめました。

心得

①

芸術文化には「社会的価値」があることを知る。



超絶技巧の演奏、見るものを圧倒させる美術作品は、それ自体価値あるものです。ですが「アクセス」のために知っておきたいのは、芸術の「社会的価値」。

芸術活動を通じて自分を見つめ直すこと。今までとは違った価値観と出会うこと。芸術活動を通じて教育や福祉、まちづくりなどの活動が活性化すること。芸術や芸術家をもつ「考え方」が人や社会に与える影響にも「価値」があるのです。



②

芸術文化を自分の活動に取り入れることは、新しい価値観を生み出すことであることを知る。



芸術家の人たちと一緒に新しい活動をすることは、慣れないうちは驚きの連続かもしれません。

何ヶ月も前から準備を周到に行う市民活動団体や行政の考え方と、ぎりぎり直前まで細部にこだわり創造的な力を発揮する芸術家の考え方は、真逆かもしれません。

芸術文化は新しい価値観をもたらすものだということをよく理解し、新しいやり方を発明していくという意識が重要です。





芸術文化のことを理解し合う コミュニケーションを、丁寧に。



普段見ているもの、感じていることが人によって違うように、同じ「芸術文化」という言葉を使っている、具体的に思い描くものはさまざま。演劇、お絵描き、ダンス、ハーモニカ…。

「アクセス」を高めるためには、その人が使っている「芸術文化」という言葉がどんな意味を持つのかを意識したコミュニケーションが重要です。共通言語を持つために、一緒に芸術文化の活動に参加したり、ワークショップを企画するのも一つの方法でしょう。



芸術文化で何ができるのか、 具体的にイメージする。



芸術文化の「アクセス」を高める、と言われても、自分の活動と芸術文化との接点をどのように見つけたらいいかわからない、という人がほとんどでしょう。

芸術文化に触れる活動をすることで、どんな可能性が開けるのか。すでに日本国内で行われているさまざまな活動を知ることが大切です。このハンドブックはこうした観点から、数多くの全国の事例を取り上げる形で編集されています。

このハンドブックに掲載されている事例を手がかりに、自分の「芸術文化」に対する考え方をアップデートし、このまちの芸術文化への「アクセス」を高めていく手がかりになれば幸いです。

大野城市での芸術文化の取組

大野城市では現在、芸術文化に関する様々な取組を行なっています。
今後はこのハンドブックを活用しながら、さらに芸術文化に触れる機会を増やしていきます。

大野城まどかぴあ



大野城まどかぴあは、演劇やコンサートなどが行われる3つのホール、生涯学習センター、男女平等推進センター、図書館、会議室や実習室を備えた多目的複合施設です。音楽や舞台芸術、映画など多様な芸術の鑑賞機会の提供、市内の学校などに芸術体験を届けるアウトリーチ事業のほか、初代館長であり世界的アーティストの池田満寿夫にちなんだ全国公募の版画ビエンナーレや美術・舞台芸術を体験できるワークショップなどの参加型事業も行なっています。

大野城心のふるさと館



大野城心のふるさと館は、「ふるさと大野城」をまるごと体感できる市民ミュージアムです。歴史・こども・にぎわいをキーワードとし、これらの機能の融合によって、多様な利用目的で、世代を超えた交流を深めることができます。展示だけでなく、定期的に講演会やコンサートなどのイベントも行なっています。



大野城市 PR キャラクター「大野ジョー」

その他、芸術文化の取組

福祉

障がい福祉の分野では、障がいのあるアーティストによる「みんなのチャレンジアート展」を開催しています。地域福祉の分野では、「ふくしフェスティバル」を開催し、福祉団体等によるダンスの発表や作品展示を開催しています。高齢者福祉の分野では、シニアクラブが市内地区ごとに、歌謡大会や芸能祭を企画して、発表会を開催しています。

教育

小学校や中学校で、音楽祭や吹奏楽部の合同演奏会などを行なっています。また、市では、大野城市の文化遺産を学ぶ「ふるさと創生学校じまん事業」の支援も行なっています。

コミュニティ

市内の各地区コミュニティセンターで、個人や団体の展示や芸能発表会を行なっています。また、文化連盟が地域の子どもたちを対象とした事業を行なっています。

にぎわい

商店街の店舗に子どもの絵画作品を展示したり、外国の文化を知るイベントや講座などを実施しています。

芸術文化 × ○○

「やりたい！」がとびだすハンドブック

発行日 2022年3月18日

編 九州大学大学院芸術工学研究院長津研究室

編集 長津 結一郎

編集協力 曾我 香菜子、平原 早和子

デザイン 長末 香織

発行 大野城市地域創造部コミュニティ文化課文化政策担当

〒816-8510 大野城市曙町2丁目2番1号

TEL (092) 580-1996

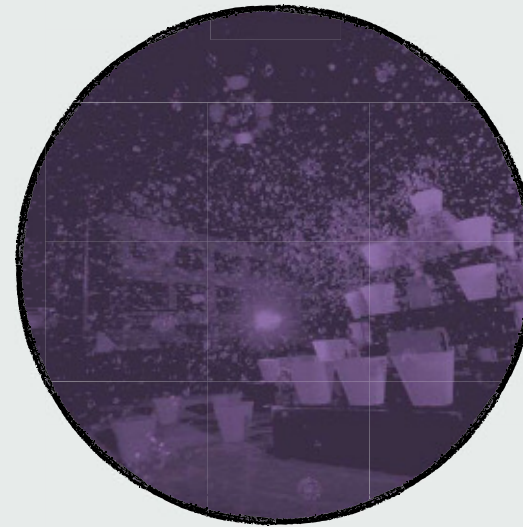
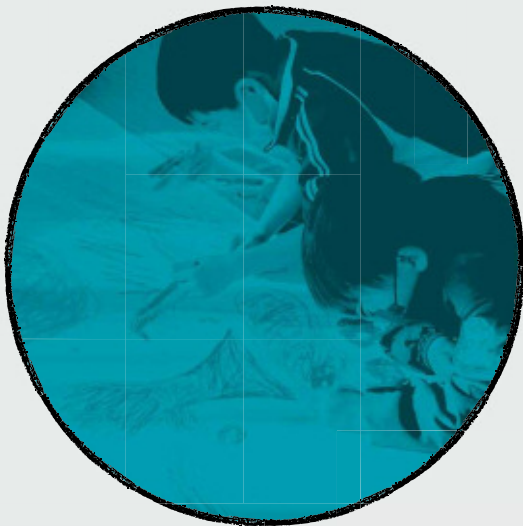
FAX (092) 573-7791

Mail shakai@city.onojo.fukuoka.jp

- ・本ハンドブックは、九州大学大学院芸術工学研究院との受託研究「芸術文化に対するアクセシビリティの調査研究」の成果物です。
- ・本ハンドブックは、非営利目的に限り、出典を明記することを条件に利用（転載、コピー、共有等）を許可します。
- ・本ハンドブックのPDF版は、以下のURLよりダウンロードできます。
<http://www.city.onojo.fukuoka.jp/s021/020/040/geijutsubunkahandbook.html>



\ Arts and culture? /



芸術文化×〇〇『やりたい!』がとびだすハンドブック

